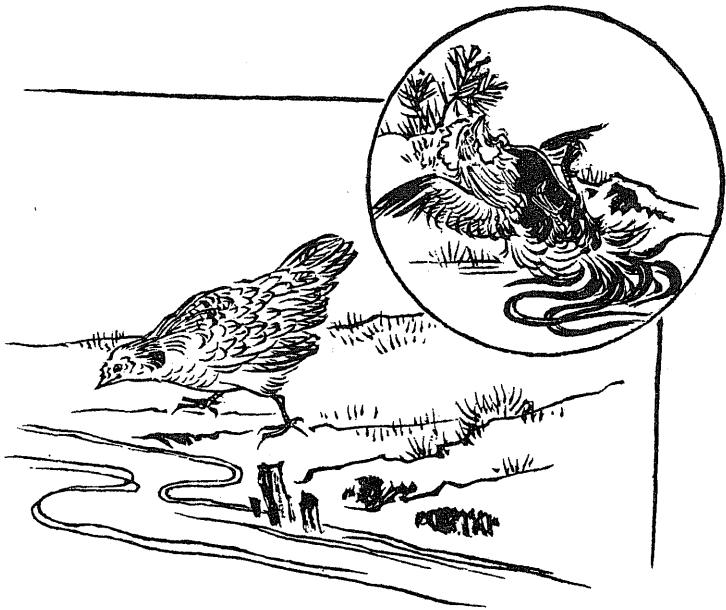


鶏にわとりの葬式そしき

いつの事ことでしたか、ある處ところに
 夫婦ふうふの鶏にわとりが 一所いっしょに住すんで居いま
 した。お互たがひに約束やくそくをしまし
 ても一人ひとりが 食物たべものを見付みけた
 時ときわ 一人ひとりで食たべて仕舞しまわな
 い 必かならずず二人ふたりで分わけて食たべよ
 と ゆーことに決かめました。
 所ところが ある朝あさ 牡雞おんごりの方はうが
 一ひの梅うめの種たねを見付みけだしました、

て あたりまえならば 約束通り 牝鶏めんどりに分わけてや
 っ て 半分はんぶんづゝ食たべなければならぬですが 其その
 又また梅うめの種たねが 大きおほくて 丸まる々くして居いて 如何いかにも甘あじ
 そーでありますから 牝鶏めんどりわ それを分わけてやるの
 が どーにも惜おししくなりまして 牝鶏めんどりにわ なんに
 も 言いわないで 黙だまって一人ひとりで飲のみ込こんで仕舞しまった
 のです。

所ところが 大きおほな梅うめの種たねを一人ひとりで飲のみ込こんだのですか
 ら 堪たまりません あんまり大きおほすぎで 牝鶏めんどりの喉のどに
 つまつまったので さー牝鶏めんどりわ 苦くろしくてくもー今いまに



息^{いき}が つま っ て 死^しに そー に
な っ た も ん で す か ら 苦^く。
し そー な 聲^{こゑ}を 擧^あげ て 牝^め鶏^と。
を よ び ま し た。

「あー、息^{いき}が つま っ て 苦^く。
しい 今^{いま}に 死^しぬ か も 知^しれ
ない どーか お 願^{ねが}い だ か ら
走^はっ て 行^いっ て 水^{みづ}を 一^{いっ}杯^{ぱい}。
取^とっ て 來^きて 飲^のま し て 吳^ぐ。
れ あー 苦^くしい」

牝鷄めんどりわ そんな譯わけとわ一向いっかいに知らしらないで 近邊きんぺんで

しきりに餌えをさがして 居をったのですが この苦くるし

相まな聲こゑを聞ききましたから 吃驚びっくりして 何なにもかも打抛うちな

つて 急いそいで小川こがわの方ほうえ かけかけて行いったのです。小

川がわにわ 奇麗きれいな水みづが どんどん流ながれてぬますが さ

一ひと困こまった事ことはわ 水みづの入いれ物ものがない あちらこちら

探さがして見みたけれども 見附みづからない 今いまにも牡鷄めんどりが

死しぬかも知しれないとおもって あわてゝ 驅かけ廻まわっ

てやっとな 蜷貝しじみのふるいを見みつけ出だして それに

水みづを入いれて 口くちにくわえて一いっ生せい懸命けんめいに驅かけ戻もどったで

ス



すむ あーもー遅おそかったです。見る
 と牡おん鶏どりわもー死しんで仕し舞まって 動うごか
 ない 身か體らわ冷つたくなつて 目めを眠ね
 っつて横よこにころげています。如何いかにも
 苦くしかつた様な死まに顔かほをして。
 此この有あり様さまを見みた牝め鶏どりの吃お驚ろわ どー
 でしたるー!!! さしあたり 蜆しほ貝がいを
 そこに置おいて 起おして見みたが もー
 起おきない 嘴くちばしをあけさせて水みづを飲のま
 して見みても水みづが通とらない あまりの

事に聲も出ないで たゞうろくして居ましたか
見れば見るほど悲しくなつて来て も一堪りません
ので「一聲こー」とばかりに泣き出しました。

すると、牝鶏の泣き聲が あまり高かつたもんで
すから近所の森の獸類が 何事が起つたのかと思つ
て皆出て來ました。來て見ますと 此有様で牝鶏が
死んだ牡鶏の側に 泣き倒れて居ます。そこで皆が
だんく譯を聞いて 「それわ まーお可愛相に」と
云うのでそれくお悔みを述べています。

然し何時までも こーして置く譯にも行くまい

何れお葬をしなければとゆーので 皆が相談します
 さしあたりまづ 死骸を入れる棺桶を拵らえ様と申
 しますと 鼠が
 『それわ 私共が 本職ですから やりましょー』
 ともしして 五六匹で 板片だの木片だのを何所か
 らか持つて来て見てる中に拵らえて仕舞った。
 そこで 用意がみんな出来ましたから さーこれ
 からお墓えみんなでお葬に出かけ様とゆーので 葬
 の行列が出ました。
 牝鶏が一番先きに立って 牡鶏の死骸を入れた棺桶



を車くるまに載のせて 引ひきな
がらぞろくと練ねつて
行ゆきます 途みち々くでもこ
の悲かなしい葬そと式しきに出で遭あう
動物どうぶつが 皆みな其その譯わけを聞きい
て 吾われもくも送おくつて
行ゆきます。

さてだんく 行ゆき
ました所ところが 大たい變へんに深ふか
い谷川たにかわが ありましたが

之こにわ困こまった 橋はしがかゝつて居いない さてどしした
 ものと 皆みんながか寄よつて相談きだんしましたが 一匹いっぴきの蛇へびがか出で
 て來きまして 『それなら さしあたり 私わたしがか橋はしにかゝ
 っ て 皆みんなさんをお渡わたしもししましよーとすぐ蛇へびがか橋はし
 にかゝりました。

そこで 第一だいいち番ばんに 牝めん鷄どりがか棺がんの車くるまを引ひいて 渡わたつ
 て向岸むかうえ着つきました それから 皆みんなの動物どうぶつがか一いっ所しょに
 揃そろつて渡わたりかけましたが 丁度ちやうど真ま中なか頃ころまで行いつた時とき
 あんまり大勢おおいぜい一度いちどでしたもんだから 橋はしにかゝつた
 蛇へびがか重おもさに堪たえないで 川かわの中なかへ落おつちた
 て



大變な騒ぎになつて
皆が川の中で溺れて死
んでしまつたのです。
ですから可愛相に牝
鶏が たゞ一人で車を
引きながら小山の所ま
で來まして 地を掘つ
て牡鶏を埋めまして
その上に土をかぶせか
けて それから そこ

いらに在つた木片を其上に立て、それから其前に
ちやんと座つて泣いて居ましたがとうく泣き死に
死んで仕舞ひましたとさ。

之とゆゝのも 皆さんはじめに 牡鶏が たゞ一
人で慾ばりをしましたたばかりで この様に 皆
不幸な目に遭つたのでしよー!!!

